— 観 察 記 録 —

沖縄県与那国島におけるカワリサンコウチョウ *Terpsiphone paradisi* の観察記録

渡辺美郎¹・籠島恵介^{2,*}

¹ 〒 655-0035 兵庫県神戸市垂水区五色山 2-3-8-304

² 〒 770-8064 徳島県徳島市城南町 2-1-12 二軒屋住宅 5-302

(2015 年 4 月 19 日受付；2015 年 8 月 7 日受理)

キーワード：カワリサンコウチョウ, *Terpsiphone paradisi*, 与那国島, 日本初記録.

日本鳥学会誌
Japanese Journal of
Ornithology
© The Ornithological Society
of Japan 2016

Yoshiro WATANABE¹, Keisuke KAGOSHIMA^{2,*}. A record of Asian Paradise Flycatcher *Terpsiphone paradisi* on Yonaguni-jima, Okinawa Prefecture, Japan. Jpn J Ornithol 65: 43–45. (2016)

Key words: Asian Paradise Flycatcher, *Terpsiphone paradisi*, Yonaguni-jima.

¹ 2-3-8-304, Goshikiyama, Tarumi-ku, Kobe, Hyogo 655-0035, Japan.

² 5-302, 2-1-12, Jonan-cho, Tokushima, Tokushima 770-8064, Japan.

1. 種名・観察個体数：カワリサンコウチョウ
Terpsiphone paradisi 1 羽

なお、本種の和名については山階（1986）に準拠した。

2. 観察者名：渡辺美郎，籠島恵介

3. 観察日時・場所：2014 年 9 月 25 日 14 時 31 分，沖縄県八重山郡与那国町，満田原森林公園駐車場（24°27'23"N, 122°58'33"E）

4. 観察距離：約 7 m. 500 mm の望遠レンズ付きデジタル一眼レフカメラでメボソムシクイ上種 *Phylloscopus [borealis] superspecies* を撮影中にファインダーの中に現れたため，そのまま撮影したが，数秒後には飛び去って見えなくなった。双眼鏡等では観察していない。

5. 観察した環境：観察地は比川集落から久部良に抜ける林道沿いにあり，標高約 100 m の北側斜面，沢に面した湿った環境にあった。樹高 5 m 程度のスダジイ *Castanopsis sieboldii* を主体とした若い常緑広葉樹林内に，ケナガエサカキ *Adinandra yaeyamensis*，ヤエヤマクロバイ *Symplocos caudata*，ヤエヤマヒサカキ *Eurya yaeyamensis* 等を中心とし

た低木が生えていた。

観察地点にはカラスザンショウ *Zanthoxylum ailanthoides* の実を採食するためにメボソムシクイ上種，メジロ *Zosterops japonicus*，エゾビタキ *Muscicapa griseisticta*，ズアカアオバト *Treron formosae*，キンバト *Chalcophaps indica* などが次々に訪れていた。

6. 形態に関する記述：直前に見ていたメボソムシクイ上種の大きさと比較して 2 倍弱の大きさであった。頭部は黒色で，頭頂部付近には青味光沢を帯びているのがわずかに見える（図 1b）が，カメラのファインダーで見た限りでは，これがより明瞭に見えていた。また冠羽が後方に伸びていた。胸は薄い青灰色で黒い頭部と喉元で明瞭な境界線を形成していた。腹（図 1a, b）および下尾筒（図 1c）は白色だった。淡青色の細い明瞭なアイリングがあった（図 1a）。嘴はやや青味を帯びたスレート色で暗肉色が入り組んでいた（図 1a, b）。上背・下背・肩羽および上尾筒は明るい栗色（図 1c）で，肩羽付近にはわずかに黒っぽい羽毛があった（図 1b）。尾羽は角尾で，上面からも下面からも明るい栗色に見えた（図 1c）。跗蹠は黒く，趾は青灰色であった（図 1a, b）。

次列風切の羽軸とその周りは暗色で，羽縁が栗

* E-mail: ekusiek15754@nifty.com

doi:10.3838/jjo.65.43

JOI:JST.JSTAGE/jjo/65.43

図1. a.b.c. 沖縄県与那国島で撮影されたカワリサンコウチョウ (2014年9月25日, 撮影: 渡辺美郎).
Fig. 1. a. b. c. Asian Paradise Flycatcher on Yonaguni-jima (On 25th Sep. 2014 by Yoshiro Watanabe).

色であった (図1c). 初列風切は最外側羽がすべて黒色で, 他は外弁の羽縁が栗色で黒色部分が多かったが, 内弁は確認できなかった (図1c). 初列大雨覆は外弁の羽縁が褐色で他は黒色であった (図1b). 大雨覆はすべて明るい栗色であった (図1c).

7. 計測値: —

8. 種を同定した規準: 本個体はメボソムシクイの2倍弱のサイズに見えたので, 全長20cm程

度と考えられる. このぐらいの体サイズの鳥類で, 後方に大きめの冠羽が伸びることにより頭部が三角形に見えること, 頭部が黒色で明瞭な淡青色のアイリングがあること, 上面が一様に明るい褐色である一方, 下面が白色であること, そして尾が比較的長い独特の形態であることから, サンコウチョウ *T. atrocaudata* またはカワリサンコウチョウのいずれかと考えられた (Moeliker 2006).

カワリサンコウチョウ14亜種のうち, 少なくとも亜種 *paradisi* と亜種 *inцей* では, 胸部の淡い青灰色と黒い頭部の境界が喉元で明瞭であり, サンコウチョウでは明瞭ではない (山階 1941; Moeliker 2006; Robson 2011; 廖 2012). 本個体では境界が明瞭であった. また, 本個体の背中の色が栗色で鮮やかなこともカワリサンコウチョウの特徴に一致していた (山階 1941; Moeliker 2006; 廖 2012). ただし, 鮮やかな栗色のサンコウチョウの雌成鳥をみることもある (籠島 個人観察).

カワリサンコウチョウとサンコウチョウの雄成鳥は, それぞれ30cm, 28cmもの長い尾が特徴なので (Moeliker 2006), 本個体は雄成鳥ではないと考えられる. 山階 (1941) は, カワリサンコウチョウ亜種 *inцей* 栗色型の尾羽は一様に赤栗色としているのに対し, サンコウチョウの尾羽は「雌成鳥は黄褐色に富んだ暗褐色. 第一回冬羽 (雄および雌) はそれよりも黒色がち」としている. 雄の若い個体は尾が短いため雌によく似ているが, 尾羽の色は第一回冬羽 (暗褐色) と成鳥 (黒色) の中間色と記されており (山階 1941), 本個体の特徴と一致しないため, やはりカワリサンコウチョウと考えられた.

また, 山階 (1941) は, カワリサンコウチョウ亜種 *inцей* について, 幼羽は頭部・腮・喉が褐色味があり, 第一回冬羽は頭部・腮・喉が黒色で, 嘴はスレート色, 幼羽から体羽と一部の雨覆とを換羽しており, 第二回冬羽は換羽により成鳥に近い羽色となり, 成鳥は嘴が淡青色としている. 本個体は嘴が暗色で, 頭部から喉にかけて褐色味が無く, 肩羽には幼羽と考えられる羽毛があり, 初列雨覆が暗色であることは幼羽のままであると考えられ, 亜種 *inцей* 第一回冬羽の特徴を備えている. なお, カワリサンコウチョウの頭部には青味光沢があるとされる (山階 1941; Robson 2011; 廖 2012) が, 第一回冬羽については光沢が弱く (山階 1941; 廖 2012), 野外光線下で必ずしも確認できるものではない (廖 2012). この個体についても拡大しないと読み取れない (図1b) ので, 参考とし

て記す。

以上のことから、本個体はカワリサンコウチョウと考えられ、亜種 *inцей* 第一回冬羽と特徴が一致している。しかし、カワリサンコウチョウの 14 亜種の中には、上に述べた文献を参照する限り、第一回冬羽の詳細な形態が不明なものもあるため、亜種 *inцей* 以外の亜種の可能性も完全には否定できず、亜種の同定については、今後の検討課題としたい。

9. 観察した行動：本個体は水平な枝にとまり、ホッピングで移動した後、飛び去った。その間数秒であり、鳴き声は聞いていない。

10. 写真あるいは写真の有無：あり (図 1a, b, c)

11. 死体・標本保存場所：—

12. 過去の記録とその文献：日本鳥学会 (2012) においては、本種の国内での記録は無く、日本初記録と考えられる。

13. その他：筆者らは、2014 年 9 月 23 日から 26 日まで断続的にこの観察地を訪れたが、本個体を確認したのは 9 月 25 日だけであった。

14. 考察：カワリサンコウチョウ 14 亜種のうち、4 亜種 (*inцей*, *leucogaster*, *saturator*, *nicobarica*) が渡りをし、残り 10 亜種は留鳥である (Moeliker 2006)。亜種 *inцей* は中国東部・東北部およびロシア極東部で繁殖し、東南アジアで越冬 (Moeliker 2006) する。台湾ではほぼ毎年、通過の記録がある (Brazil 2009; 廖 2012) ため、台湾から約 110

km しか離れていない与那国島に渡来する可能性が高い。渡りをする他の 3 亜種は、通常の渡りコースがそれぞれインド、インドシナ半島、およびインド洋であり、与那国島まで少なくとも 1,800 km 以上離れている。

なお、図 1c を拡大したところ、尾羽の先端が擦れていないため、「かご抜け個体」ではないと判断された。

本稿を取りまとめるにあたり、本個体の同定について助言を頂いた林志輝氏 (中華民国)、今井光雄氏、前原一統氏の各氏、識者への仲介の労をいただき、アドバイスを頂いた渡部良樹氏、貴重な意見を頂いた匿名レフェリーの方々に深く感謝申し上げる。

引用文献

- Brazil M (2009) *Birds of East Asia*. Christopher Helm, London.
- 廖本興 (2012) 台湾野鳥図鑑。晨星出版、台中。
- Moeliker CW (2006) Genus TERPSIPHON Gloger, 1827. In: del Hoyo J, Elliot A & Christie DA (eds) *Handbook of the Birds of the World. Vol 11. Old World Flycatchers to Old World Warblers*: 285–295. Lynx Edicions, Barcelona.
- 日本鳥学会 (2012) 日本鳥類目録改訂第 7 版。日本鳥学会、三田。
- Robson C (2011) *A Field Guide of South-East Asia*. New Holland Publishers, London.
- 山階芳麿 (1941) 日本の野鳥と其生態第二巻。岩波書店、東京。
- 山階芳麿 (1986) 世界鳥類和名辞典。大学書林、東京。